

西田 大保市議は4期13年ということですが、どうして政治家をめざされたのか、お伺いしたいのですが。

大保 父親が県議会議員をしていましたので、その手伝いを20歳になったら早くやりたいとずっと思っていました。ちょうど20歳になった時に県議会議員選挙があり選挙カーに乗り、ウグイスをして父を身近で感じる事ができました。

当時、幼稚園の先生をしていたのですが、子どもたちと関わっている中で、なぜ子どもたちのための施策があんまりなのか（少ないのか）疑問に思っていました。その頃父が、投票に行く世代がご高齢の方だから政治家に相談しようと思う世代もご高齢の方が多いいということ saying していました。子育てしているお父さんお母さんたちというのは、きっと誰に相談したらいいのかわからないという方がすごく多いのだなということその時に気づき、自分が議員だったらこうしたいなというような展望はその頃から持っていました。

西田 お父さんの政治活動を身近に感じることで、なぜ子どもたちの施策って少ないのだろうということを感じ政治家になろうと決意した。よし行こうと思ったきっかけは？

大保 それから10年たち、父親が亡くなったあと、森山県議が県議会議員とし

て働くことになり、事務所スタッフとして手伝ってほしいと声をかけていただきました。森山県議のところにご相談に来る方は、若いお父さんお母さんが多く、ご本人がおられないときは私が代わりに聞かせていただきました。それを県議に伝えると、これは市議の仕事、これは僕が動けるとわけておられたので、やはり市議と県議が連携することで市民の方々すべての方のご相談を聞くことができるのではと思いました。その頃ちようど森山県議から市議に行くかとお声かけいただきました。

西田 今もそうですが、女性が前に出る、選挙に出る、政治家をめざすというのは、どの女性議員さんに聞いても、「女なのにやめとけ」とか「女になにができるんや」と言われたという経験をお話しされる方が多いのですが、そういうことはなかったですか。

大保 入ってからすごくありました。

西田 議員になられてからですか。

大保 議員になって、自分の思いを議会で、子どもたちのこと、学童のことを質問させていただいたときにヤジがすごく飛ぶのです。ベテランの男性議員さんからとんだヤジで一番衝撃だったのが、「働きたいんやったら子どもなんか産まんかったらいいんや」と言われたのです。もうなんて時代錯誤な方々なのだろうと。

西田 13年前のことですね、当選後の。

大保 はい。それがすごく衝撃で、まず議会改革だなどその時に思いまして、最初の4年程は議会改革に徹していました。

西田 変化として現れましたか。

大保 現れました。インターネット中継をまず入れまして、ヤジを飛ばすとそれもすべてマイクに入りますよとお伝えし、カメラも入れていただき、リアルタイムで流すので修正はできませんということをお伝えすると公の前では言わなくなりました。

西田 第一歩ではありますよね、公で言わない。そういう発言を反省したかまではわからないけれども議会の運営の中では大きく変化していったということですね。

大保 そこから子どもたちの学童のことなどを前に進めようとした時に私が前に立ったら足を引っ張られるだけなので、もういっそのことそういうベテランの男性議員さんを前に立てて、その方に進めていただくという形をとりました。

西田 子どもたちの課題をその人たちに一緒にやってもらうと。

大保 後ろでちゃんと紙を作るから、先生言ってくださいというような感じで。

西田 ペーパーも作って、資料も作ってという。

大保 はい。

西田 全部が全部まだまだ女性が議会や政治分野に進出していないということで男性の意識改革が必要かと思います。13年間の中で特にこだわってやってきた政策とか何か印象に残っていることはないですか。

大保 最初の頃は子育てするお父さんお母さんのための施策は本当に少なかったんで子育てしている世代の声をしっかり届けるようになりました。そうするとやはり学童保育がもっと充実しなければいけないというところに視点が動きました。学童保育をさらに大きくするには第二学童、第三学童ととにかく増やし、3年生から6年生までみんなが預かってもらえる、そして1年生から本来預かってもらえる、そんな学童にするために教育委員会と子育て支援課に市長も入れ、学童の会長さんととにかくたくさん議論をしていただいた結果、いま第二学童、第三学童もすべて学校の敷地内にできるようになりました。

西田 それはすごい。結構時間がかかりましたか。

大保 そうですね。かかりました。

西田 今年に入ってコロナの感染拡大がまだ止まっていない状況で、檀原市ではどのような対策がとられていますか。

大保 ひとり親家庭で子育てをしながら働いているお母さんたちで職を無くし

てしまった方がたくさんいらっしゃいます。なんとか支えていかなければなりません。各小学校を回らせていただいて校長先生のお話を聞かせていただいた時に、休業していた分、夏休みを短くして学校を開けなければならなかった時、15校ある中で6つ、まだ自校式で給食をやっています。夏休みに学校を開けて給食を作っていただく、その給食室にクーラーがついていなかったのです。実際給食を作ってもらったところを見学させていただき温度をはかると50度を超えていたのです。

西田 火を使ったりしますからね。

大保 5月でもそれくらいあったので夏休みはもっとひどいことになるということで一回、議長に相談しましょうと調理員さんたちに議長室へ来ていただきました。議長にその旨をお伝えしていただきました。そこからコロナの対策として国からの補助金もありますので教育委員会に交渉に行きました。当時教育委員会はスポットクーラーをつけようと考えていたのですが、スポットクーラーは蛇腹があり、そこから冷たい風が出てくる感じなのですがもうそれでは追い付かないというのが目に見えている。なんとかちゃんとしたクーラーを設置していただきたいと総務課と教育委員会に交渉に行き、いち早く夏休みにつけていただくことができました。

西田 子どもたちの食を守るという意味と職員さんたちの健康管理を含めてで

すね。休業で夏休みが短縮され、出ていくと自校方式の給食室にクーラーがない。現場からの声が一番大事ということですね。

大保 はい。それが一番だと思います。

西田 今後、議員活動の中で特に力を入れていきたいことをお聞かせください。

大保 13年前は本当に子どもたちのこと、子どもたちを育てているお父さん、お母さんたちの声というのが届かなかった時代だったので私が声を届けていかなければならないとお仕事させていただきましたが、時が過ぎ今となれば実際に自分の子どもを育てていらっしゃる議員さんが檀原市議会の中に増えてきました。子育て世代の声というのはもう私でなくても届くのかなと思っています。その中で私の視点というのはやはり基本は子どもなのです。子どもたちの視点というのを絶対忘れてはならない。いま書道教室をしている中で中学生や高校生たちの親にも言えない相談と、いうのを直接聞かせていただいているのですが、子どもたちがこうしたいと思っていることと、親がこうなってほしいという思いにはやはりギャップがあるのですね。そこを親御さんたちにも伝えてあげる第三者であり、そして子どもたちにそのままいいよって言って肯定する第三者でありたいというところが強くあります。子どもたちの居場所づくりに注目していきたいなと思っています。その拠点になれるのが檀原市で言

えば図書館ではないかと思っています。たくさんの蔵書を置いてたくさんの方により多くの本を借りていただくというコンセプトのもとに建てられた図書館なのです。そのまま、現在まで来ている状況なので図書館がコミュニティの場にはなっていない。その中で本にもっと親しんでもらいたいという市民団体の方々が絵本の読み聞かせをやっていただいているのですが根本的にコミュニティの場になっていないので制限がすごくされているのです。

西田 図書館の利用ルールがあるからですね。

大保 そうなのです。それを根本的に今の時代に合わせた図書館の在り方に変えていきたいと思っています。私の理想の図書館は岐阜市のメディアコスモスという大きい図書館が3年位前にできたのですが、そこまで大きいのはできないとしても、そのコンセプトというのが子どもからお年寄りまでが気軽に集ってそこでコミュニティを作り「逃げ場」になっているのですね。規模は違うとしてもそういった形の「逃げ場」になればいいなと思っていますので。

西田 少子化、高齢化の時代の中にあって核家族化が進んでいる、そこに子どもたちの居場所づくりイコール高齢者の皆さんにとってということでも世代間交流にもなるし、これは来年以降の市議会議員活動の中で実現させて

いきたいということですね。

最後に何か言い残したことなどあればお聞かせください。

大保 この13年間ずっと、女性の仲間を探してしまして議会の中で私だけではなく、たくさんの若い女性が入ってきてくれて、その力が強くなったらもっと変わるんじゃないかなと常にこの13年間思い続けているので、「我こそは」と思われる方が本当に榎原市議会議員として来てくれたらうれしいなと思っています。もしおられましたらよろしく願いたします。

西田：今日はお忙しいところ本当にありがとうございました。

大保：ありがとうございました。